

## 小学校の英語強化 子どもに何を求めるのか

編集委員 高橋真理子

朝日新聞 2013年11月2日

(太字は引用者による)

小学校での英語教育を強化する文部科学省の方針に、大きな不安を感じる。

現在は英語に親しむことを目標に、5、6年生で週に1回だけ外国語活動の授業がある。それを正式な教科にして週3回に増やし、外国語を楽しむ活動は3年生から始めようと検討されている。政府の教育再生実行会議が5月に出した提言を実現させようとしているのだ。

だが待ってほしい。これが本当に英語力を上げるのか。逆に弊害はないのか。こうした懸念を払うデータや研究、そして説明がなさ過ぎる。

外国語習得の難しさは日本人なら誰もが痛感している。母国語なら難なく習得できるのに。だから小さいころから習えばいいというのは、あまりに安易な発想だ。

32歳で米国に渡り、英会話に苦勞しなくなるまで10年かかったという医師の小池英夫さん(52)は、自分の子どもたちが英語と日本語の両方をスムーズに身につけたことが不思議でならなかった。その理由を長年考え続け、脳にとって言語はコンピューターの基本プログラムと同じという考えにたどりついた。

基本プログラムは計算機一つに一つと決まっている。脳にとっても、母国語は普通は一つ。だが、ときに複数入れることができる。そこが人間の脳のすごいところだ。どうやって入れるか。「子どものころに母国語を話す人と**言葉のピンポン**をすることによって」と小池さんはいふ。

よく「言葉のキャッチボール」と言われるが、**キャッチボールでは遅過ぎる。テニスのスピードでも不十分。ピンポンのようなやりとりを日常的に続ける。そうすれば、たとえ複数の言語であっても混乱なく同時に身につく。**

小池さんは脳科学の専門家ではない。ただ、医師の目で「脳と言語」のさまざまな事例を観察し、分析した。的を射た見方だと私は思う。

週3時間の英語授業では「言葉のピンポン」とはほど遠い。英語を脳にセットするのは無理だ。では、何を指すのか？ 子どもに何を求めるのか？ そこをあいまいにしたまま「東京五輪の前に始めたい」などと言うのは、あまりに無責任ではないか。

**同時通訳者として著名な鳥飼玖美子さんは「英語は中学校からでいい」と再三、訴えている。**その重みと、脳と言語の深い関係を、教育行政当局は理解しているはずだ。禍根の残る決断をしないでほしいと切に願う。